

自己変革に導くナラティブ・アプローチを通しての支援

— 自己認知の再構築から主体的な課題解決へ —

A Support through Narrative Approach leading to a Self-Reformation

— From rebuilding of the self-recognition to independent problem-solving —

地理歴史科 藤野 敦

<要旨>

高等学校はこれまで以上に生徒の成長段階を見取り、諸問題に対し主体的に解決に向かう学びにつなぐことが求められている。生徒にとっては、現在から未来につながる自身の課題解決や展望への道筋も、過去からの経緯の連続性の上存在する。現在の課題解決のための行動や認知の変化は自身の一連の物語の修正として自覚され、それらは自身によって書き換えられるものである。この行動変化を促す方法としてナラティブ・アプローチの方法を取り入れ、生徒が自己の経緯と現状についてのメタ認知を促すシートを活用した、生徒面談、生徒指導、保護者会等の実践を示す。この認知の再構成の過程を経ることが、主体的に目標設定と行動に向かう姿勢の構築につながると考える。

<キーワード> ナラティブ・アプローチ メタ認知 時間性 経緯 自己認知 生徒面談 リフレクション 対話

1 はじめに

1.1 問題意識と研究課題

近年の教育における能力・資質の議論は、生徒にこれまで以上に能動的な活動や主体的な参画意識の育成を求めている*¹。また、それぞれの高等学校修了時の到達目標に向けてカリキュラム・マネジメントの視点の重要性が示されていく中、教科・科目や特別活動、キャリア教育等を総合的に捉えた生徒の成長への教育段階を構築することが求められている。

このような状況の中で、高等学校においても共通に、これまで以上に各生徒の状況について、能力・資質の発達段階を総合的・継続的に確認する役割が学校や教員に求められる。また、生徒は自身の状況や課題を自覚的に認識し、行動を展望することが求められる。

本稿では、以上の視点からその効果的な生徒の状況確認と主体的な行動を促す方法論として、ナラティブ・アプローチの手法を導入した実践を考察してみたい。

1.2 ナラティブアプローチと教育現場への応用

ナラティブ・アプローチは医療・看護・心理・福祉などの臨床領域や文化人類学、司法領域や企業経営・組織経営など、様々な領域で学問分野をこえて実践や研究が展開している*²。ナラティブでは、行為としての『語り』、その産物としての『物語』からその過程を説明する*³。野口裕二によれば、ナラティブ・アプローチとは「ナラティブ（語り、物語）という概念を手がかりにして何らかの現象に迫る方法」であるとする。そしてナラティブ

が伝えるものについて、「時間性」「意味性」「社会性」の三点で整理をおこなっている。「時間性」とは「語ることで出来事の時間的順序、出来事の連鎖」を整理し、「語りながら」因果関係を「構成していく」とする。ナラティブは「語る者と語られる者の各々の文脈で意味を持ち、一義的には確定できない傾向があり」（意味性）、語り手と聞き手の共同作業によって成立するため、「その関係性において個々のナラティブを考察する必要があり」（社会性）、「社会生活、社会的現象や現実はこのナラティブによって成立しており、組織化されている」と捉える*⁴。

また、クランディニン⁵はデュイの経験観に基づき、三次元探求空間という解釈装置の提案の中で、現場での経験を構成しているナラティブを、状況 situation、連続性 continuity、相互作用 interaction の3つの側面から解釈した。状況（教室・学校などの場の特性）とともに、連続性の次元では、過去—現在—未来という時間軸が設定される。「相互作用は、個人的なもの（すなわち思考）と、社会的なもの（すなわち他者とのコミュニケーション）が注目される」とした*⁵。

杉山直子は、思考力の発達において、個々の物語理解と個々の物語想像の援助としての教育活動の必要性を述べ、生きていく力としての批判的リテラシーを中心として、その獲得に必要なナラティブ・アプローチについて再認識し、教育課程に位置づけいく可能性について考察をおこなっている*⁶。

1.3 本研究の視点と経緯

本稿では、学級経営、学年経営、生徒指導の場面の実践を取り上げる。主にナラティブ・アプローチの方法を意識して作成したシートの活用を示したものである。

2005年、筆者は生徒面談に関する一部の実践をまとめる機会を得た^{*7}。ここでは、生徒へ共通の質問を設け、自身と他者との関係についての認知を表現することを求め、生徒の感情を含む言葉の表現から、生徒の描く自己の現状についての認知を抽出し、その省察を通じて行動や認知の再構成を導き指導を展開する方法を検討した。生徒は自己の認知を表現する過程で、自己に起きた様々な事象や状況を客観的に理解・整理することが可能となり、その結果、問題の解決や目標の実現に向けての行動を主体的に起こすことが可能となるという仮説である。この検証の過程で、質問に答える生徒の多くが、自分や周囲におこった事象や感情的な推移、さらにはそれに連なる現状について、その原因や理由を過去から現在に至るこれまでの経緯の中に求め、一つの物語として自身の行動を構築し説明しようとする傾向が顕著に示されていた。生徒にとっては、未来となる自身の問題解決への道筋も、自分の過去の経緯の続編であり、課題への対処はこの物語の修正として自覚されていた。自分の行動や感情を新しい方向への展開させることは、第三者によって新たに接ぎ木されるがごときものではなく、自身によって自分の物語を書き換えるという認識であった。変化への意志を喚起するために重要なことは、これまでの経緯の中で起こった現象（事実）についての認知を表現し、生徒に自身の認知を確認させ、再構成へと導く過程にあった。

この過去の実践の成果と課題から、生徒に、自己のこれまでと現在の状況の認知について、時間的な連続性の中から表記を求め、自己の認知への対話をおこなう方法として以下のシートを作成した。図1で示すように、例えば学習の状況の推移を評価する場合、多くの場合、教員の指導は考査などの数値化した指標で評価し指導を行う（図1「評価の数値的な経緯」部分）。しかし、生徒自身はそこに至る中で意識されたサイド・ストーリー（例えば部活での精神的なストレスの影響など個人が当時向き合っていた諸課題）の影響も含めて、自身の学習の経緯を認知し、評価している（図1「思い描く経緯」部分）。

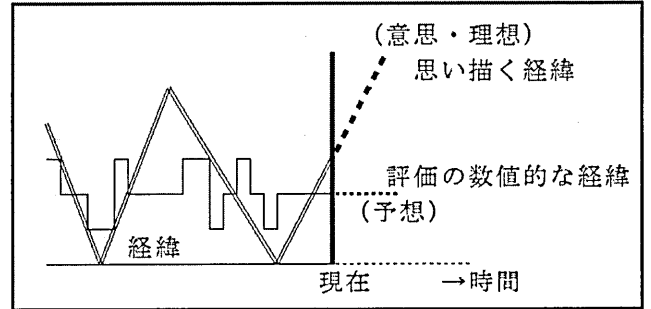


図1 シート（自己認知作表部分）模式図

そして、それらの「物語」の延長上に今後の展開を描く。それは自身のこれまでの経緯を含めた自己認知に則ったものであり、自己の主体的な意思、理想を含めた展望につながるものと考えられる。

本稿では上記の過程に着目し、①生徒と教師の対話による生徒の自己認知の再構成、②教師と保護者の認識の共有、③生徒間の他者との相互作用、などの実践を通して、生徒が現状の自己を取り巻く諸課題に対し、主体的に目標設定と行動を起こす方法論を考察したい。

2 スタートカリキュラムとして

2.1 入学後2週間での実践

2.1.1 時間軸にそった認知を導くことの効用

基本的な学校生活のサイクルが一回りした入学後2週間の時点で第1回のシート記入を実施した。ある時点での生徒の状況をシート等を利用して確認する方法としては、レーダーチャート式の記入シート（図2）が知られており、これを使用した実践について示唆に富んだ論稿も存在する^{*8}。しかしながら、以下の実践（2013年4月）では、前章で示したように、生徒がこれまでの経緯についての認知から現状を確認することと、またその省察を経て今後の展望に向けての行動指針を促すことを目的とするために、2週間という短期間であっても、時間軸からの考察を可能とするシートを準備し、入学当初の自分の状況と実際にはじまった学校生活の現実の中での認知の変化を表現することを求めた。

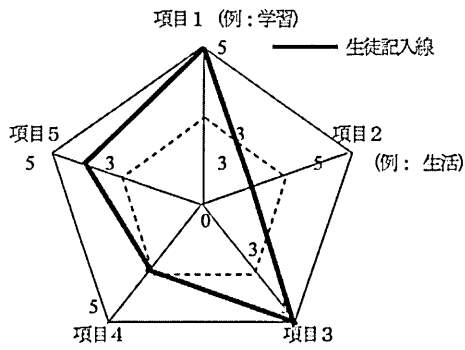


図2 チャート式シート模式図

図3 入学後2週間実施 生徒記入シート

2.1.2 変化に対する対話

入学後2週間という期間での設定であったが、提出されたシートの作図部分について一部例示すると、以下のようになった。

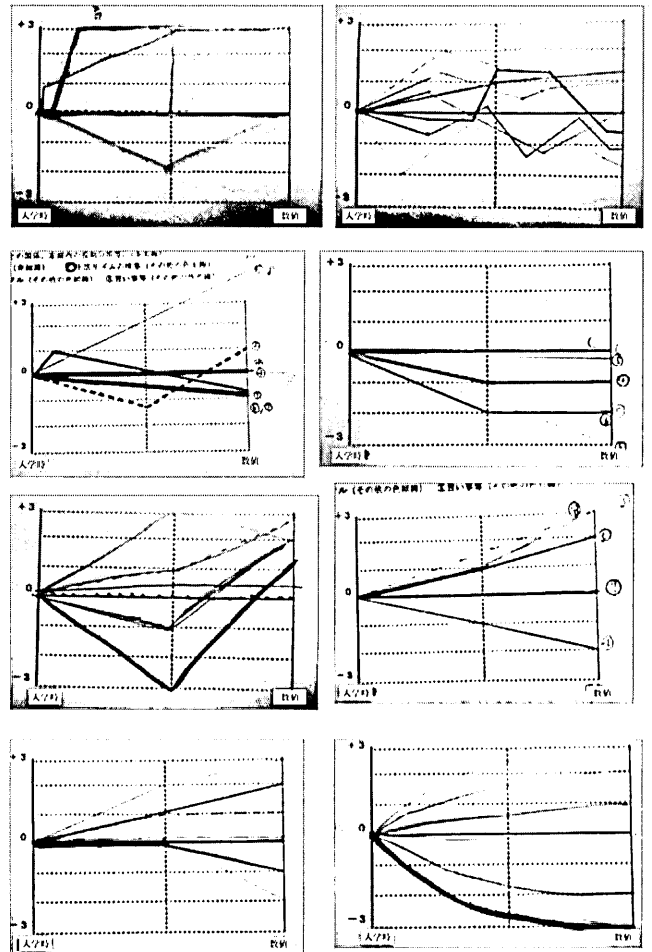


図4 入学2週間後グラフ部分記入例

このように入学後の環境の変化の中での期待や不安が現在の地点にどのように位置づけられているのか、彼らが自身の現状をどのように認識しているのかが表現されている。そこにある葛藤をどのようにくみ取り、今後の学校生活の中でよりよい方向に向かう行動を相談することで、彼らの物語の延長に位置づけていくことが可能となる。

これらのグラフは、記述した生徒が自己認知をおこなった結果が示された「伝えたいこと」「伝えるべきと感じていること」が内在している部分であるため、問かけをおこなえば、生徒の主体的な言葉としての反応が強く返ってくる。

例えば教員がこれらのグラフを題材として、面談等を通じて以下の3つの提案を示すことによって、生徒は基本的な自己分析、自己認知、目標設定と行動の方針を自問しながら構築することが可能となる。

- ・グラフの変化部分の理由（この部分はどのようにして急降下

したのか、急に上がったのは何かきっかけがあったのか、など)

- ・経緯を経た現状の認知の確認 (最近はどうして上がったのか、停滞しているのはどうしてか、今はどう感じているか、など)
- ・それらを踏まえた改善方法の考察 (どうしたらいいと思うか、これを維持するための方法は、何をすればまた伸びるか、など)

これらの対話の中で、生徒は内面的な葛藤や過程の諸問題、あるいは友人関係や部活動、さらには学校を離れた集団での葛藤など、それらは教員が当然想定できない、サブストーリーをともなって表現する。それらは生徒個々にとって、一連の物語として現在の感情や行動につながり、組み立てられて語られる。教員や保護者などが生徒に対して、今後の目標設定や行動動機を促す場合、これらの生徒の一連の流れの中に位置づけなければ、生徒の主體的なストーリーとして展開することはない。教員の役割は、生徒のこの一連の流れと望むべき今後の在り方に、整合性を構築する努力を行う点にあると考える。

これらの作業で導き出された認知は、教師によって問題点を指摘され、改善のための行動を指示されることとは本質的に違う。与えられた方法をなぞるのではなく、自己認知に基づいた新たな目標設定が行われ、自らの時間的な行動の物語の中で一連の流れとして今と今後を結んでいくことで、そこに主体性と責任感がはぐくまれる可能性が存在すると考えられる。

2.2 第1学年1学期末のシート記入

1年生の1学期末には以下のようなシートで再び振り返りをおこなった。

一学期を振り返って
1E()番 氏名

1学期を終った後、
以下の項目を入学時の基点とし、現在までの経過をイメージして、自分の1学期の生活ストーリーを描いてみてください。
(横に書きをつづけてください)

①学習 ②関係(入っていった)
③家庭(家族との関係、家庭内の役割分担等)
④友人関係等 ⑤授業・メンタル

評価に向けて
気にかかるところ、書けておきたいこと

夏休み→学期への改善(自己イメージアップのために)
→進捗に関して

・生徒生活において

・その他

その他で気にかかっていることがあれば

8月から新たにスタートする人への自己紹介。

<それぞれの軸の解釈・理由>

①学習	
②関係	
③家庭	
④友人関係	
⑤授業・メンタル	

このシートでは、同じ4月をイメージして描いた部分でも、前回の入学後2週間で描いたものと比較すると、グラフの形が変化している生徒も少なくない。かつて否定的に描いていた線が肯定的なものに変わっていたり、順調と示した事項がマイナスの傾きに変わっていたり、同じ時期の位置づけが変化しているのである。

過去の経緯についての自己評価は、記入時点での評価として自分が「妥当である」と認識していることが重要であり、絶対的な「正しさ」は問題ではない。記入時点での生徒自身が、過去の経緯をどのように位置づけ、現在に結びつけているかを見取ることが重要である。

面談等の場面で過去のシートを対照させて、入学当初の自分の評価を、3ヶ月後の自分の視点から再評価させることで自己認知を深めることも可能となる。

3 長期の期間の振り返りから不安を乗り越える

3.1 第3学年1学期末の状況

発達段階を考慮すると、義務教育段階では長期にさかのぼる経緯の振り返りは難しい。しかし、高校生は1、2年という単位を、そこに付随する自己の判断、感情を含めた記憶とともに振り返ることは可能であり、自己の現時点に至る認知の客観化が期待できる。

以下は第3学年における実践である。

基本調査シート 3年1学期末
3G()番 氏名

以下の項目を入学時の基点とし、現在のイメージと比較、イメージを記入してみる。①学習(個人軸) ②行事(集団軸) ③生活リズム(睡眠時間・食事時間など)(色 点線) ④メンタル面、音楽・セラピーセッションなど(色 点線)

<それぞれの軸の解釈・理由>

①学習	学習の進捗や理解度を表す。授業や課題の取り組み状況を示す。
②行事	学校行事や部活動の参加状況を表す。楽しさや達成感を示す。
③生活リズム	生活リズムの安定性を表す。睡眠や食事の習慣化を示す。
④メンタル面	メンタル面の安定性を表す。ストレスや不安の軽減を示す。

<現在の自分にとって、学校生活はどのようなものか?>

学校生活は、学習や行事を通じて、自己成長や達成感を得ることができている。生活リズムも安定し、メンタル面も安定している。学校生活は、自己成長の場となっている。

図5 第1学年1学期末記入用紙

<現状で>

学年	大専	専修・学科
期	1学期	
期	2学期	
その他		

<志望の状況>

1学期 化学・物理

2学期 物理の授業が面白い。

→ 履修に変更

入学科目として、どちらかというとき、このままいけば	化学	物理
また上願する教科・科目	物理	化学
入学科目として、どちらかというとき、心配・不安を感じている教科・科目	物理	化学

夏期講習でとった科目・講座は？

化学・物理・英語・数学

卒業とのバランスをどう考えている？「二兎」を追い、手に入れるための戦略・秘策・決意は？

卒業とのバランスをどう考えている。二兎を追い、手に入れるための戦略・秘策・決意は？

最近よく考えてしまうこと。

卒業後の進路について考えている。二兎を追い、手に入れるための戦略・秘策・決意は？

図6 第3学年1学期末実施シート（記入、男子）

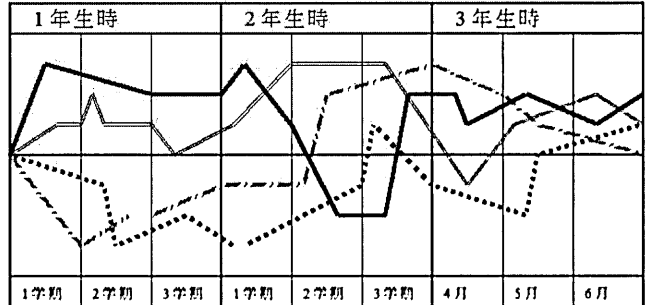
第3学年の夏期休業は受験対応の講習受講や、夏期休業明けに設定されている進学を中心とした面談に加え、実践校では伝統的に9月実施の文化祭に第3学年が中心となり参加するため、その練習や作業が計画されている。文化祭に対して、生徒は伝統的に意識が高いが、一方で他校との比較による時間的な余裕のなさから、受験準備との両立への不安に対する精神的な重圧が大きい。これをどのように目的に向かって自ら進むように整理するかが、担任の課題となった。

3.2 第3学年1学期末 実施 調査シート項目内容

以下、第3学年（2011年7月実施例）に実施した図6の記入シートの内容項目を示す。

3.2.1 作表

<項目1>（指示）「学習，行事，生活リズム（睡眠時間など），精神面（意欲など）の項目について，入学時を『0』として，理想のイメージと比較，+-で採点してみる」



— 学習 --- 行事 = 生活リズム - - - 精神面など

図7 第3学年1学期末 調査シート 作表模式図

3.2.2 記入項目

<項目2> 「1で作表したそれぞれの項目を示す線の推移に対する説明，解説・理由。」

- ①学習
- ②行事
- ③生活リズム
- ④精神面

<項目3> 「現在の自分にとって，学校生活とはどのようなものか。」

<項目4> 「現状の志望校」

<項目5> 「志望の変遷（1年次→2年次→現在に至る）」

<項目6> 「①現在，入試科目としてどちらかというとき，このまま行けばまあまあと思える教科・科目（教科・科目名と理由。複数）」「②入試科目として，どちらかというとき，心配・不安を感じている教科・科目（同上）」

<項目7> 「夏期講習などでとった科目・講座は何か」

<項目8> 「文化祭とのバランスをどう考えているか。『二兎』を追い，手に入れるための戦略・秘策・決意は？」

<項目9> 「最近よく考えてしまうこと」

3.3 項目の目的と生徒の記入例

<項目1>について 作表（グラフ記入）

グラフの記入は現在（第3学年7月）から振り返って，

入学以来の推移・変化を自分でどのように認識しているかを考えさせることを目的としている。第1学年終了時におこなった振り返りと、第3学年になって振り返った過去のイメージは、グラフの推移が一致しないことが多い。生徒がこの間に得た経験と成長とともに、自身が過去に出会った事象を現在からさかのぼって再構成しているからである。現在の自分の状況についての自己認知によって、過去の事象をその経緯として物語化して位置づけている。従って、この表の変化の部分に生徒の現状認識が表出している。

<項目2>について 表の自己解説

以下は質問項目の2「作表した項目線の説明、解説・理由」部分の生徒の記入例を2つ示す。

(生徒A一男子)

- ①学習：部活が忙しかったので2年は仕方がない。3年1学期は4月が一番頑張っていた。
- ②行事：2年の合唱祭以降、行事に熱が入るようになった。
- ③生活リズム：部活をやめてから不規則になった。
- ④メンタル面：勉強はしなければいけない気持ちはあっても、行動に移せる強さがない。

(生徒B一女子)

- ①学習：模試で焦り。4月は調子が良かったが、6月頃から思ったほどはかどらなくなる。
- ②行事：文化祭に向けた準備に熱が入ってきた。
- ③生活リズム：3年になって自覚を持ち始めた。最適な睡眠時間をつかみ始めた。
- ④メンタル面：一本の線で表しにくい。地震後は結構落ち込んだ。学校に来ることが癒やしとなった。

このように、グラフを記入し、その解説を短文で示す段階で、生徒は現在の地点を過去の流れの中から「自分はどのように位置づけているのか」ということを、客観的な視点によって再認知していることが見られる。

<項目3>について 自分にとっての学校生活の位置づけ
第3学年になると、予備校等の位置づけや受験準備の計画などから、今までの自分と学校の関係に変化が生じる。生活のリズムや精神的なバランスを崩す事が少ない。学校の状況にもよるが、実践校の場合は多くの生徒にとって、小学校以来保持していた「学校」に対する無条件の絶対的な価値観に揺らぎが生じる時期である。

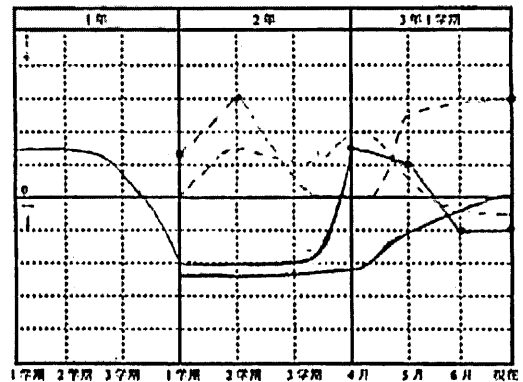
この時期に生徒自身に学校の位置づけを再度問い、再認知を求める意図を持つ質問である。以下、生徒C一女子の解答例を例示する。

(生徒C一女子)

「友達に会える。精神的回復のできる場。連休など自習室に閉じこもっていたとしても、どんどん気が減入ってしまう。勉強に関しては志望校変更で教科が減り、心持ちは苦しくなることもあり、少し負担。」

この生徒は、図8のグラフにもあらわれているように、2年次に様々な不安を感じてきていた生徒であり、学校生活も自身の中の位置づけに苦慮していた。その中で、学校以外の時間を持つことが増える中、学校を自身の安定を保つ場所として再置しようとしている。この自身の位置づけを言語化しながら再認知することは、夏期休業中の精神的安定を保つ上では重要であると考えられる。

面談等でその確認をすることが求められた生徒である。



<それぞれの線の解説・理由>

①学習	1年間は部活が忙しかったので仕方がない。3年1学期は4月が一番頑張っていた。
②行事	2年の合唱祭以降、行事に熱が入るようになった。
③生活リズム	部活をやめてから不規則になった。
④メンタル面	勉強はしなければいけない気持ちはあっても、行動に移せる強さがない。

<現在の自分にとって、学校生活とはどのようなものか？>

友達に会える。精神的回復のできる場。連休など自習室に閉じこもっていたとしても、どんどん気が減入ってしまう。勉強に関しては志望校変更で教科が減り、心持ちは苦しくなることもあり、少し負担。

図8 生徒C一女子 グラフとコメント

<項目5>について 志望の変遷

質問項目4で現状の進路について、具体的に志望大学をあげることを求めているが、それが自身でどの到達度での決定であるのかを再認知させることを目的とした質問項目である。進路への自身の考察の経緯を振り返り、熟慮の末の決意であるのか、あるいは決意を持った目標とするためには何が必要なのかを求める。ここでは以下、

三名の記述事例を示す。

(生徒D—女子)

「1年次：ほとんど何も考えてなかった→2年次：〇〇大学をはじめとして法学部？→現在に至る」

(生徒E—男子)

「1年次：1学期～夏、特に考えず、2学期悩む。2年次：ほぼ確定→現在に至る」

(生徒F—女子)

「1年次：目標は高くということで国立に行きたいと思っていた。2年次：1年と同様に思っていたが、少し現実を甘く見ていた、というか、何をやりたいのかを考えていなかったと思う→現在に至る」

生徒Dの場合は「法学部」をどのように捉えてきたのかを確認する必要があるかもしれないし、生徒Eは確信的な決定に誤解がないかを確認する必要があるかもしれない。生徒Fは後悔が含まれた振り返りになっていることから、時間をかけて話題とすることが必要であろう。このように、進路等に関しては、その考察経緯を言語化することで現状で話題とすべき方向性が表出されてくる。また、生徒自身も問題の所在を明確に認識することが可能となる。

<項目6>について 学習状況の確認

①見通しがつきそうな科目と、②不安を感じている科目を上げ、その理由を記述する。

(生徒G—女子)

「①現代文：解法のコツをつかんだら、結果がだんだん出てきた。②古典：知識の欠落が見えてきた。世界史：いまいち勉強の仕方にも、模試の結果にも自信がない。」など、具体的な方法について、教科担当につなぐ要素が抽出される。

<項目8>について 行事と学業の両立について

行事と学習の両立を前提に、どのように自覚すべきかを問いかける質問である。

(生徒H—女子)

「家に帰ると疲れて寝てしまうので、(文化祭の)練習の帰りは自習室に行き、やらざるを得ない環境におくようにしている。忙しければ忙しいほど燃えるので、頑張りたい。」

(生徒I—男子)「めりはり」

(生徒J—女子)

「人と会うこと、練習に打ち込むことを精神的な栄養として、切り替えのスイッチにできればいいかなと思って

ます。」

(生徒K—男子)

「どちらもやるべき事はやる。ムダはしない。」

このように具体的方策や決意を示す生徒が多数を占めたが、(生徒L—男子)は「二兎追えないと思います」との記述があった。生徒Lは、この時点ではその不安の大きさは行動などの観察からは見取することは難しかったが、<項目1>の作表では以下のような記述を示していた。

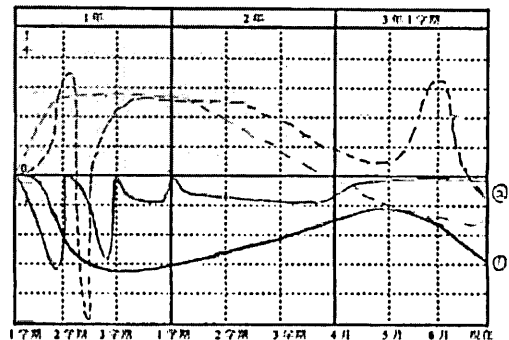


図9 生徒L事例

グラフからは、現状に向かってネガティブな状況がうかがえる。生徒Lは<項目5>「志望の変遷」に、1年から「変わっていません」と示しており、<項目9>「最近よく考えてしまうこと」では、「受からないなあと思ってしまう」と記述されていた。一貫した目標を入学時に設定して進んできた。差し迫った現実の中で、その固定されている道筋への自信が揺らいでいた。日常的には教科の課題なども全てについて誠実にこなしていた生徒であり、教科などで指摘をうけることはない。ただ一方で行動について優先順位をつけることを得意としない生徒であった。夏期休業前に不安との向き合い方について対話を進め、背後にある様々な葛藤を対話しつつ、9月以降2月末まで、面談が繰り返されたが、早期に対応できたことがその後の展開に大きく影響した。

4 学年等の集会や保護者懇談会での活用

ここまで、シートを利用しつつ、生徒との面談を主軸に問いを設定し、自ら語ることで自己認知を振り返り、位置づける中で成長を促していく方法例を示した。以下は、シート等を利用して各自が表現した認知を集団で共有し、自己の認知と対照させつつ再認知させていく方法の例である。

4.1 学年集会などで他者との共有から、

自己の認知を確認・修正する

以下は学年集会などの集団の場を利用して、過去の一年生との対話をおこない自己認知の再構成を促した実践である。前章までは、生徒が自己の過去の経緯と現在を対比させつつ、自己認知の再構成を促す実践を示した。本章では、過去の他者と現在の自身のストーリーを対照させることによって、自己認知の再構成を促すことを目的とした。

入学後の4月末、連休直前の時期、学校生活への慣れと疲労、期待と現実の中での不安をどのように前向きな学校生活構築へ転換させていくかを目的とした学年集会で使用したプレゼンテーションの一部である*9。上級生が第1学年の1学期末の時期に実施したシートの記入事項をまとめたものである*10。「この時期、他の一年生は何を考えているのか（先輩たちは何を考えて過ごしていったのか）」というテーマで、「懸念事項」「変わろうとしていること」「新生活への決意、覚悟」などを示した。

<p>前向きなアプローチが大事!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・決断力 ・自分の言動に責任を持つこと ・積極的な姿勢・積極性 ・責任感（何かの役職について、きちんとやり遂げようとする意欲が大切。） 	<p>友人関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係 ・友 ・友達を大切にすること。個性を認め合うこと。 ・友達を大切にすること。
<p>人間関係 自分を高める!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人にはそれぞれ違った特徴があり、また長があるということ。 ・相手の話を素直に受けとめること。 ・集中する、真剣になること。 ・自分の考えを持つこと 	<p>目標をもって生活することが大事!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夢、個性 ・夢・目標（一生懸命になれるから） ・受験時に考えた高校生活（忙しくて流されるけど、あこがれを思い出し実現する努力をした。）
<p>集団と自分の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集団の中の規律 ・「普通」の人間の中で生活していることを忘れないようにすること。 ・礼儀・公私の区別 ・良い意味でマイペースでいること。 ・周りを見すぎないこと。 	<p>もっともであるが.....</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次々やってくる虫への耐性 ・代えの靴下?

<p>質問事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一ヶ月を振り返って ・高校生活において、大切に(重要視)すべき事柄、心がけはどのようなことだと感じたか。 	<p>セルフコントロール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次に何があるかを確認すること ・物事を早めに終わらせること ・時間の管理時間を大切に使う ・全てにおいて、「切り換え」ができること。 ・ONとOFFをしっかりと分けること
<p>時間をうまく使う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・迅速な行動 ・作業効率 ・物事の優先順位をつけて行動すること。 ・無駄な時間をできるだけなくすること ・先々のことを考えて行動すること。 ・遅刻しないこと。 	<p>学習を進めていくために...</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭での勉強 ・自習力 ・授業内容を理解しておく(復習をする) ・学習計画をしっかりと立てる ・授業を受けるときは下敷きが必需品。
<p>健康</p> <ul style="list-style-type: none"> ・睡眠 ・生活のリズムを整えること。 ・生活リズムを築き上げる ・体力と気力 ・気を抜く力。 	<p>前向きなアプローチが大事!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・決断力 ・自分の言動に責任を持つこと ・積極的な姿勢・積極性 ・責任感（何かの役職について、きちんとやり遂げようとする意欲が大切。）

図10 入学一ヶ月、高校生活で大切にすべき事柄

これらの言葉の中には、数年前、同じ時期に真摯に新たな生活に向き合う身近な年長者の姿が表現されている。セルフコントロールや時間の使い方など、自身と同様の葛藤をもった一年生当時の諸先輩と、現在接する成長した諸先輩の姿を対照させることによって時間軸の存在を意識し、現在の自身の物語を今後に向けてどのように描いていくべきかの指針を構築することが可能となる。この過程の中には、他者と照射することによって、自己の認知を外化し再構成に向かう機会が含まれていると考えられる。集会の後、生徒に対して、「どの部分に共感し、自身はどのように今後に向けての行動を起こそうと思うか」という質問を与えることで、自身の葛藤に対する行動指針が示されることができた。

4.2 保護者懇談会での活用（教員と保護者の共有）

入学当初は生徒の心情と同様に家庭にも不安な時期である。学校も家庭も時にこの不安から過干渉となることが少なくない。それは生徒自身の省察の機会を阻害することにつながり、その後の3年間の学校生活の構築に大きな影響を与える。一学期に実施される保護者懇談会の目的は、高等学校への進学という機会における不安とその克服への過程を、生徒の発達段階の中で家庭と学校が

共有し、生徒の試行錯誤の機会を適正に見守る姿勢を構築することとした。

以下は、生徒が持っている葛藤の水準や向かおうと努力している方向性を保護者と共有する方法として、シートの記述を活用した実践例（2013年、学級別の保護者懇談会で実施）である。

当日の進行は、以下のようにおこなわれた。

- ①シート（図3）を提示し、内容と目的の説明。
- ②入学後2週目に記入したシート（図4）45名分を、プレゼンテーションのスライドで示し、様々な葛藤を個別に抱えて高校生活をスタートしている点や多くの生徒が同様に感じつつあることを共有。
- ③シート最終部分の「一年間の達成目標」についての記述（図11）を紹介し、葛藤をもちつつ、生徒がどこに向かおうと意識しているかを提示。
- ④このような状況の中で、家庭・保護者および学校・教員が、どのような姿勢を持って接すべきかを協議。各家庭での様子を交えて小グループで相談する場面を作り情報交換。

一年間の達成目標
<ul style="list-style-type: none"> ・まわりに流されずに自分がすべきことを集中して取り組む。 ・まずは友達をたくさん作る。みんなと仲良くして最高のクラスにする。 ・部活と勉強の両立。 ・勉強の自分のペースを作る。 ・コツコツと、それだけ、とにかくコツコツと。 ・計画性を持つこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・とにかく努力を怠らず、がんばっていきたいです。 ・すてきな人になる。 ・学校を休まない。 ・文武両道。 ・おちつく。 ・先輩を超える先輩になる。
<ul style="list-style-type: none"> ・あきらめずに続ける。 ・うわべではなく、中身のある性格になりたい。 ・やるべき事を全てやり、公的役割を全て果たす。 ・皆勤賞を取る。 ・苦手なものを乗り越えて、長所を伸ばしたい。

図11 入学2週間後の「一年間の達成目標」

保護者懇談会のように、個人面談とは違う集団での協議の場であっても、多くの場合、学校（教員）のイメージや成績等の数値的資料で生徒について語り、評価することは当然必要な情報提示である。その評価に各家庭ごとの評価が加味されて生徒個人の課題を抽出し、反省を促すことが多い。しかし、それは生徒にとっては、自身の葛藤の経緯とは無関係な指摘と受けとめられ、理解はできるが、自身の主体的な行動に移すことは難しい。

学校にはこれらの周囲の認知する課題点と、生徒自身の中で構成される「自分の物語の展開」をつなぐための方法が必要とされる。図11で示された言葉は、きわめて素直で本質的な彼らの言葉である。周囲ができることは、彼らが設定した目標に至るために、「そのためには何をすればいいか」というような、その過程での具体的な行動を「考えさせる」ことを導くアドバイスである。

5 終わりに

当然であるが、本稿での実践は普遍的な事例ではない。目の前にいる生徒の状況によって、そのとき必要とされる課題から適切な方法を考案していくものである。本稿の実践でも、医療機関による治療を受けている生徒や、様々な状況を抱えている生徒については、この方法（特に経緯や過去を振り返るという方法について）を用いることが適切でないと判断した場合もあった。

生徒自身の行為や行動について、一定の基準による客観的な指標によって評価を与えることは、当然ながら成長過程において必要なことである。一方で、それらと彼らの自己認知を結ぶ手立てを評価者が考慮しなければ、生徒の行動に連なる「自己変革のエネルギー」には結びつかない。これらは教科指導においても、生徒指導においても、特別活動においても共通することである。

今後、学習方法の変化や学校の新しいあり方が求められる教育現場において、高等学校における生徒の成長を見取る役割をどのように学校が担保し、彼ら自身が自己の成長を促すために、新たな学習の方法を自身の内面的な意味や意義と結んでいくことができるかが問われている。

*1 キャリア教育との関連やアクティブラーニングなどの方法の議論なども含め「主体的な意識」は、育成目標であると同時に、その過程においても必要とされる。

*2 野口裕二『ナラティブの臨床心理学』（勁草書房、2006）、同『ナラティブ・アプローチ』（勁草書房、2009）。

- *3 二宮祐子「教育実践へのナラティブ・アプローチ：クランディニンらの「ナラティブ探求」を手がかりとして」(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科『学校教育学研究論集』(22)：37-52, 2010年)。
- *4 杉山直子「教育課程編成におけるナラティブ・アプローチ2 一批判的リテラシーの形成を中心に」(梅光学院大学『論集』第44号, 2011年)。杉山はこの論文の冒頭で、日本での「指示待ちの者やクレーム的になりがち」とされる教育現場での課題に関連して、生徒の生育史上の「自分自身で葛藤しつつ自分を作る機会」の重要性を指摘し、義務教育では学校において「集団・社会生活で葛藤しつつ仲間を育てること」を、高等学校では「より社会実践的解決方法と力が必要」と述べる。
- *5 前掲 二宮 (2010)
- *6 杉山直子「教育課程におけるナラティブ・アプローチ - 思考力の発達を中心に - 」(梅光学院大学『論集』第43号, 2010), 前掲杉山 (2011)。
- *7 藤野敦「待つこと、引き出すこと 一生徒の『感情』が主導する面談へー」(コアネット人材開発研修センター『TALK 教員のためのスクール・コーチング実践事例集～指導でも放任でもない関係性を求めて～』2005年)。
- *8 河東田敦 (八雲学園中学校)「面談シートをきっかけに生徒が思いを語り出す」(コアネット人材開発研修センター『TALK 教員のためのスクール・コーチング実践事例集～指導でも放任でもない関係性を求めて～』2005年)
- *9 2013年4月26日第1学年学年集会で実施時の資料。プレゼンテーションソフトを用いて共有した。当日はSNS等の利用についての生活上の指導を、このプレゼンテーション資料の後に連続しておこなった。
- *10 2009年第1学年第1学期7月に記入してもらったシートの質問項目より作成。この学級では、同じ時期に開催した学級保護者懇談会において、この資料を利用した。
- 松木啓子「ナラティブアプローチの可能性と限界を巡ってー「異文化」の理解と詩学と政治学ー」(同志社大学言語文化学会紀要『言語文化』1巻4号, 1999年)。
- 西村愛「知的障害児・者の「主体」援助の陥穽を問う：ナラティブアプローチの批判的考察をもとに」(現代文明学研究, 第7号, 2005年)。
- 田中昌弥「教師教育改革におけるナラティブ・アプローチの可能性ーアルバータ大学・教員養成・現職教員教育研究センターにおけるNarrative Inquiryを手掛かりとしてー」(日本教育学会第70回大会 特別課題研究報告, 2011年)。
- 野口裕二『物語としてのケアーナラティブ・アプローチの世界へー』(医学書院, 2002年)
- 黒谷和志『教育実践における批判的リテラシーの形成ーパウロ・フレイレの再評価をめぐるー』(広島大学大学院教育学研究科紀要第3部第50号, 2011年)。

その他参考文献

木村優「教師教育におけるナラティブと感情ー授業中の感情的出来事に関する教師の省察の事例分析ー」(福井大学教育地域科学部紀要 (教育科学), 1, 2010年)。

早川正祐「ナラティブ・セラピーとケアー当事者の物語の重視とは何かー」(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室応用倫理・哲学論集(4), 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2009年)。